

フル国際会議化のすすめ ～AT研究会での国際会議化の 事例をもとに～

東京大学情報基盤センター

AT研究会主査

片桐孝洋

研究分野間の新たな連携に関する検討会(通称:考える会)

第1回委員会、ポジショントーク

2016年3月22日17:00- 東京大学本郷キャンパス 工学部2号館

12階 電気系会議室4

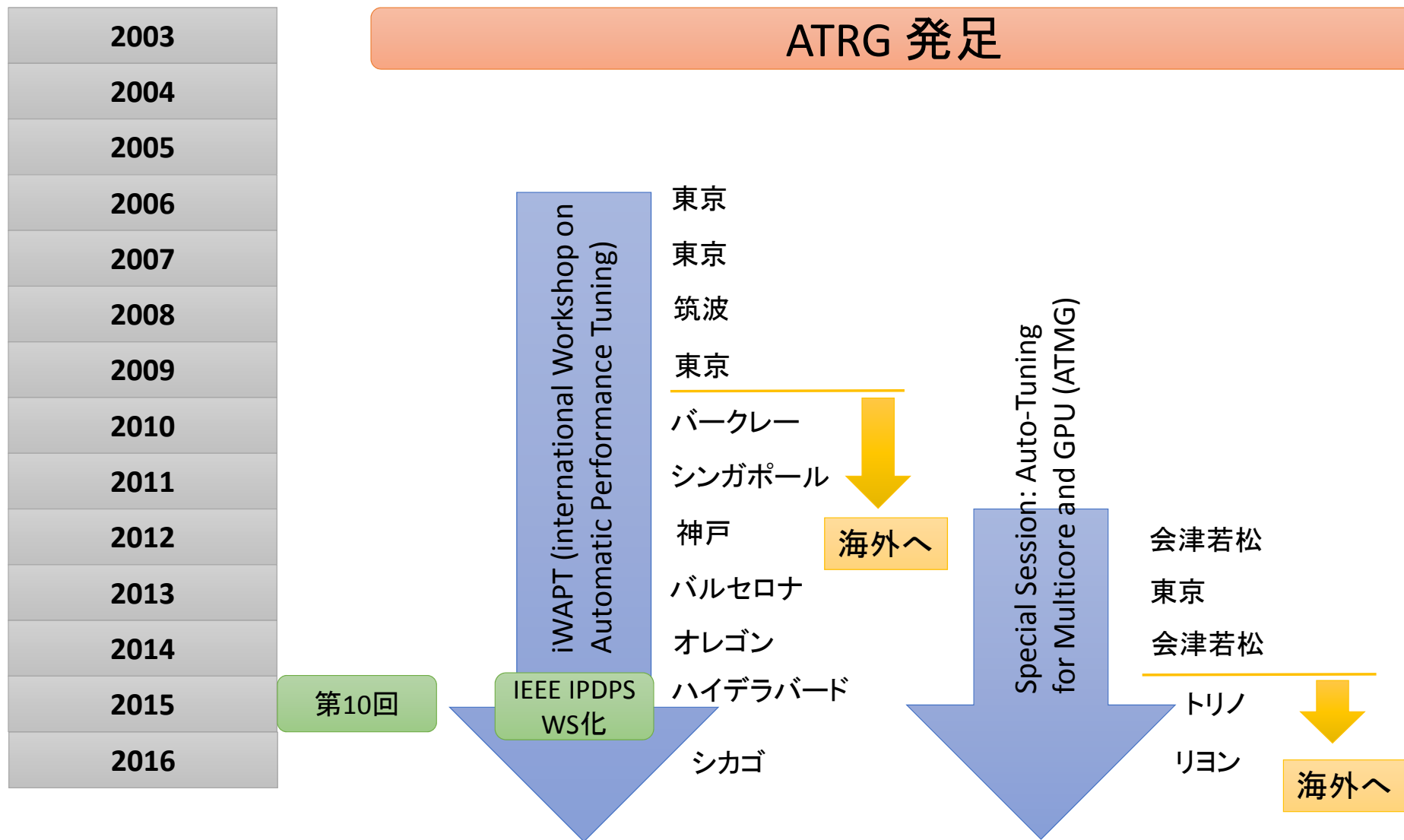
私の立場

- フル国際会議にすべき
 - 国際committee、投稿は英語のみ、査読あり、予稿集あり
- 開催場所
 - 初期は日本固定、将来的には海外も検討
- 会議の位置づけ
 - 将来は独立したトップカンファレンスになることを目指す
 - とはいっても、当初はトップカンファレンスの不採録論文の受け皿的な会議になる
 - HiPC、EuroPar、・・・

自動チューニング研究会主導で国際会議化した会議

- 自動チューニング研究会 (ATRG)
 - 2003 年～
- AT専門の国際会議は当初存在しなかったため
- iWAPT (international Workshop on Automatic Performance Tuning)
 - 2006 年から毎年、2016年 で 11 回目
 - 2015年に、IEEE IPDPSのWS化
 - 出版物が確立したのは、2008年から (IEEE Clusterの併設WS)
- Special Session: Auto-Tuning for Multicore and GPU (ATMG)
 - 2012年から毎年、2016年で5回目
 - IEEE MCSocのSpecial Session
 - 出版物は、MCSocと同様 (IEEE Xplore)

AT研究会主催の国際会議



検討事項

• 会議の形態

1. 国内の独立国際会議

- 既存会議と差別化したスコープ設定をする必要がある
- ややHPC的なスコープに比重を置く形になる？

2. 既存の国際会議のワークショップ

- ISC (HPC Asia) など、関連者の多い国際会議を検討する
- 親会議の枠組みで、出版物が決まるため、やりやすい

• 出版形態

- いずれにせよ、ちゃんとした出版物があることが重要
- 既存国際会議のワークショップにする場合：
 - Springer LNCS、IEEE Xplore、Procedia Computer Science
- 国内の独立国際会議にする場合：
 - 既存の枠組みで実現：情報処理学会 JIP (ACS連携)

検討事項

• その他のオプション

• 国内の「分野横断的な」研究集会にする

- 査読無し、出版物なし(あるとしても、アブスト集のみ)
- 日本語、もしくは英語で口頭発表
- オーガナイズド・セッションのみで構成
 - オーガナイザーが発表申し込み
 - 実行委員会は、採録決定のみ関与
 - 招待講演はあっても良い(プレナリセッション)
- 既発表の最新成果を発表し、情報交換する場になる
- 既に成功している会議：
米国応用数理学会 (SIAM) のPPやCSE